

「ベッドサイド学習をする生徒のための遠隔教育の試み」

石川県立医王養護学校

☼ ねらい・目的

本校は、病院に隣接した病弱養護学校である。高等部の生徒Aは医療関係者の介助がないと病棟を出ることができない状況にあり、病室のベッド上での学習を余儀なくされている。このため、他の生徒とコミュニケーションをとったり、意見交換して自分の考えを深めたりすることが難しかった。

また、他の生徒と接する機会が少ないことから高等部やクラスの一員であるという帰属感が乏しくなるきらいがあった。これらの課題解決のため、平成19年度より、インターネットテレビ電話（Skype）を用いて教室と病室をつないで学習活動を行う実践に取り組んだ。

☼ 内容

インターネットテレビ電話の長所として、無料で恒常的に使える、特殊な機材を必要とせず学校内のどこからでもつなげる、同様に特別な技術を使うことなく誰でも簡単に扱える（環境設定をしてあれば生徒だけでも簡単に使えること）などがあり、この利点を用いた次のような実践を行ってきた。

全校集会や講演会、音楽会といったコンテンツの配信。ただ一方的な放送でなく参加場面を作るようにした。総合的な学習の時間での年間計画、文化祭行事に関する会議、生徒会や学部会など積極的に話し合いに参加した（この結果Aの全体での発言の経験が増え、自己表現の力を養うことができたと考える）。最初の遠隔授業は、ベッドサイドでは難しい実験・実演を含む授業、情報Aでの「パソコンの組み立てとOSのインストール」であった。その後も人権教育や将来に向けての学習などの集団学習、国語、国語表現の授業など意見交換を必要とする授業を中心にインターネ

ットテレビ電話接続による授業を行ってきた。特に、平成21年度は現代文の授業のすべてをインターネットテレビ電話で接続授業にしている（次頁 写真）。

☼ 実践結果（今後の課題）

文化祭出し物の映画の企画、ストーリー作り、脚本の読み合わせなどの場面で話し合いに参加するようにした。意見は出せなくても多数決など意志決定場面に参加できるような体制をとった。Aは自分の意志を決定して発言するのは苦手であったが、友人たちが自分の発言を待っていてくれるという意識から少しずつ発言が増えていった。こうしてAの自己表現の力を養うことができたと考えられる。後にAも登校して参加したお楽しみ会では苦手だった山手線ゲームにもしっかり参加できるようになっていた。

発信側の生徒たちも議事運営の生徒は常にAを意識して発言を求めており、他の生徒も自分の発言がきこえるよう交代でマイクを持ち、カメラの方をむいてしゃべるようにしている、Aの返答が遅くても決していそがさず、彼の言葉を待っている、など自然に彼への配慮を行っていた。またインターネットテレビ電話接続をきっかけに他のクラスの生徒が彼の病室を訪問する機会が増えており、つながりは明らかに強くなっていると言える。

「これからもインターネットテレビ電話接続を続けていってよいか」というアンケートには、全員が○をつけていた。このアンケート結果を伝えることなどを通じて、Aに自分がクラスの一員と認められていることを知らせ、自分が「医王養護学校のこのクラスの生徒なのだ」といった自分の居場所を確かめることができるようにした。このように行事の配信や学部会・生徒会の会議への参

加は良い効果を上げていることがわかる。A自身も自分がクラスの一員と認められていること実感しているようである。

国語、国語表現の授業など意見交換を必要とする授業を中心に、インターネットテレビ電話接続による授業を行ってきた。国語では、交代で教科書の朗読をしたり、難読文字・意味の分からない言葉を共に考えたりした。単に授業に同席するのではなくインターネットで語句の意味を調べ検索結果を提示するなど発言の機会も多くなった。またAが事前に調査し製作した教材を用いて授業する機会を持ち「自分が友人の学びを助けている」という気持ちを持てるようにした。

インターネットテレビ電話接続による授業を続ける中、教師とのマンツーマンの授業で得られない笑顔をよく見せるようになった。

なお、現在インターネットテレビ電話を用いて次のような取り組みを行っている。①継続入院している卒業生への支援としての学校行事の配信、②インターネットテレビ電話を用いた他校との交流活動、③家庭と結ぶ、④インターネットテレビ電話接続時の活用方法・楽しみ方⑤病院訪問教育の児童生徒への支援として前籍校との関わり。

実践の際、技術面での課題が多い。カメラの性能の問題で黒板の文字などを見ることが難しく、初期には音声入力小さいなどの課題があり、試行錯誤の上解決していった。現在試行している卒業生への学校行事の配信や登校できない生徒への支援のための新技術の導入も必要と考える。また人的な問題もある。接続や映像配信のトラブルがあった時、対応できる人がそばに居る必要があり。ごく一部の教師だけが使えるのではなく、誰でも使えるようになるよう講習会を持ったり、A自身が接続のためのガイドをつくったりして、他の本校職員や交流校や病院の方々にこのインターネットテレビ電話システムの有用性を示し積極的な活用を求めた。このシステムは、病院に入院している生徒、特にベッドサイド学習している生徒にとって学習のため、生活を豊かにするために大きな力となるものとする。同時に、病弱養護学校の生徒のみならず、長期欠席している在宅の生徒への働きかけのために、大きな可能性を持っている



写真・ベッドサイド学習の様子

と考える。



PR (特徴・工夫・努力した点など)

学校行事の配信では、Aのことを全教員・生徒に知ってもらうためパソコンの画面をプロジェクターに投映するなどした。また〇×クイズに参加など双方向性を生かした活動を取り入れた。教科の遠隔授業では、黒板の字が見えにくいことから今年度の現代文の授業は病室から教室への授業配信という形をとっている。この時、病室でも教室でも同じように学習効果を上げられるよう使用する教材に工夫した。継続入院している卒業生たちへの移行支援の一つとして学校で行われている音楽会などの行事を中継して病棟で投映し、リアルタイムな双方向映像を配信する。すでに卒業式の予行練習などを病院の食堂へ配信するなどの活動を行っている。県立高等学校とインターネットテレビ電話で結び交流を行い、その後の作品交換につながった。また同校へアンケートやWebページの資料提供の依頼などを行いWebページの作成を行った。卒業後も継続入院する生徒に家庭と病棟をテレビ電話で結び、いつでも会話できるよう環境設定などの支援をした。こちらも既に実践を行っており卒業後カメラ・マイクの設置などの環境設定を誰がするかと言うルール作りの段階にある。

ただつなぐのではなく、ゲーム・よみきかせなど楽しみ方をどうするか、さまざまな取り組みを行っている。また、心理的ケアをどうしていくかが課題になる。訪問教育を行っている病院と前籍校の生徒との交流が可能か、技術面での調査を行っている。